世界の日本研究 / *Japanese Studies Around the World* 2020: 72–84

近年の中国における日本書の翻訳出版および読書傾向について

潘　世聖*

小稿では近年の中国における日本書翻訳出版の情況について考える。1980年代末期に刊行された江蘇人民出版社の「海外中国研究叢書」は、学術文化界に大きな衝撃を与えるものであった。2009年に始まった日中共同プロジェクト「現代日本紹介図書シリーズ翻訳出版」は、10年間で111点を翻訳刊行した。近年の翻訳出版においては、日本の社会、歴史、思想文化を広く体系的に扱うことに重点が置かれ、読者は日本書をとおして、自国を再考し、普遍的価値観などの根源的な問題を認識する傾向が見られる。

キーワード：中国、日本書、翻訳出版、読書傾向、日本書ブーム

中国の大学で日本文学の教育研究に携わる者として、日頃から日本書の翻訳出版およびその読書傾向に関心を持ち、時には微力ながらも翻訳を試み、2015年に柄谷行人『哲学の起源』(《哲学的起源》、北京：中央編訳出版社)、2020年に藤井省三『魯迅　東アジアを生きる文学』(《鲁迅的都市漫游: 东亚视域下的鲁迅言说》、北京：新星出版社）などの中国語訳書を刊行した。今回は、きわめて個人的かつ感覚的な視点ではあるが、自分自身の体験を踏まえて、近年の中国における翻訳出版の情況およびそれに対する中国読書界の傾向を見てみたいと思う。

先にやや昔の話をさせていただく。現代中国の日本書の翻訳出版の大きな転機は、いうまでもなく鄧小平時代の1970年代末からの「改革開放」に伴うもの

* 華東師範大学外国語学院 教授。専門：日本近代文学、中国近代文学、日中比較文学。

だった。当時、我々の世代はちょうど高校を出て大学に入ろうとする時期で、そこから激しい時代的変化が一連の波のように押し寄せてきたのを、鮮明に覚えている。1980 年代後期、社会人になって間もない頃、初めて友人に勧められて読んだ日本の学術書の中国語訳は、いわゆる「中国の外から中国をみる」という発想から翻訳刊行されたシリーズ「海外中国研究叢書」（南京：江蘇人民出版社）だった。1988 年、その第 1 冊目であるギルバート・ロズマン（当時米国プリンストン大学教授）監修の《中国的现代化》（中国の現代化）[1] が出版され、読書界の大きな注目を受けた。1990 年代になると、さらに大ブレイクして、この叢書の評価は一層上がった。筆者の確認したところ、叢書は、1988 年から現在まで、合計 197 点の研究書を翻訳刊行している。1988 ～ 2000 年の間に刊行したものが 44 点で、その内訳をみれば、英国 1 、ドイツ 2、フランス 1、オランダ 1、欧州（論文集）1、北米（論文集）1 を除いて、大部分はアメリカで研究する学者の書いたものだった（中国系アメリカ人研究者も相当含まれる）。21 世紀からは、日本の中国研究も次々と登場し始め、シリーズ全体に占める割合も歳月の推移に伴い、増加の傾向にある。現時点では、全体 197 点中の 19 点に達し、約 1 割を占めている。さらに、今年 2020 年度に出版予定の 18 点中に、日本書が 5 点も含まれている。アメリカをはじめとする英文の世界の情況、及び中国系研究者の多さを考慮すれば、日本の研究にはかなりの強みと重みがあり、看過できないものと言える。

出版済みの日本書 19 点は、次のようなものである。斯波義信『宋代江南経済史の研究』（《宋代江南经济史研究》、2001 年）、溝口雄三・小島毅《中国的思维世界》（日本の雑誌論文などから選んだ論文集、2006 年）、浜下武志『中国近代経済史研究――清末海関財政と開港場市場圏』（《中国近代经济史研究：清末海关财政与通商口岸市场圈》、2006 年）、佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』（《近代中国的知识分子与文明》、2008 年）、島田虔次『中国における近代思惟の挫折』（《中国近代思维的挫折》、2008 年）、松浦章『近世東アジア海域の文化交渉』（《明清时代东亚海域的文化交流》、2009 年）、松浦章『清代内河水運史の研究』（《清代内河水运史研究》、2010 年）、吉川忠夫『六朝精神史研究』（《六朝精神史研究》、2010 年）、増田渉『西学東漸と中国事情』（《西学东渐与中国事情》、2010 年）、中島楽章『明

1　吉尔伯特・罗兹曼《中国的现代化》，江苏人民出版社，1988 年。原著は、Gilbert Rozman, *The Modernization of China*, New York : Free Press, 1981。

代郷村の紛争と秩序――徽州文書を史料として』(《明代乡村纠纷与秩序：以徽州文书为中心》、2010年)、家井眞『『詩経』の原義的研究』(《〈诗经〉原意研究》、2011年)、松浦章『清代上海沙船航運業史の研究』(《清代上海沙船航运史研究》、2012年)、冨谷至『文書行政の漢帝国――木簡・竹簡の時代』(《文书行政的汉帝国》、2013年)、酒井忠夫『中国善書の研究』(《中国善书研究》、2013年)、森正夫《“地域社会”视野下的明清史研究：以江南和福建为中心》(日本での出版なし、2017年)、狩野直喜『支那小説戯曲史』(《中国小说戏曲史》、2017年)、森正夫『江南デルタ市鎮研究――歴史学と地理学からの接近』(《江南三角洲市镇研究》、2018年)、内藤湖南『諸葛武候』(《诸葛武侯》、2019年)、福原啓郎『西晉の武帝司馬炎』(《晋武帝司马炎》、2020年)。

今年出版予定の5点は以下の通りである。福原啓郎『魏晉政治社会史研究』(《魏晋政治社会史研究》)、岩井茂樹『中国近世財政史の研究』(《中国近世财政史研究》)、三田村泰助『宦官――側近政治の構造』(《宦官：侧近政治的构造》)、大島正二『唐代の人は漢詩をどう詠んだか――中国音韻学への誘い』(《唐人如何吟诗：带你走进汉语音韵学》)及び浅野裕一『古代中国の宇宙論』(《古代中国的宇宙论》)。

学術研究、特に中国研究には、特殊な性格があり、読者の範囲も限定されている。中国における日本文化の伝播と受容の状況にそのまま当てはまりきれない部分があるかもしれない。しかし、上記の数字からわかるように、日本の中国研究が中国の学界に充分に認められ、この叢書での比重が大きくなっている傾向は十分に注目する価値があるだろう[2]。

高度な専門性のある学術書のほか、一般読者向けの日本の社会・歴史・文化に関する読み物も、改革開放期に入ってから、数多くの出版社から翻訳出版されてきた。これらの書物は、冊数や紙、印刷、装丁などの技術的な進歩がかなりあったが、国家間関係の情勢に大きく影響を受けたため、自由かつ多様な翻訳刊行体制が十分に確立していない。日本書の翻訳刊行は個々の刊行者・編集者に委ねられ、場当たり的で散発的な印象がある。そうした状況の中、2009年から最近まで実施されてきた日中共同プロジェクト――「現代日本紹介図書シ

2　江蘇人民出版社公式ウェブサイトを参照。http://www.jspph.com/BookList.html?Search=@Book_CollectionID2=:3

リーズ翻訳出版」という事業は画期的であった。

この事業の発案者・主宰者である笹川平和財団は、次のように事業概要を説明している。「中国では、日本を知る手立てとなる知的情報は日本から十分提供されていない。そのため、現代日本に関する情報が恒常的に不足している。この状況を改善するために、笹川日中友好基金は、日中の専門家によって選出された現代日本を紹介する図書を中国で翻訳・出版する。笹川日中友好基金は、各分野の専門家からなる選考委員会を立ち上げ、同委員会が作成する推薦図書リストを中国側協力団体に推薦するほか、選考委員会、中国の協力団体及び出版社との連絡調整業務を担当する。中国国内における図書の翻訳・出版業務は、複数の大手出版社関係者によって構成される「現代日本図書シリーズ編集委員会」に委託する。同委員会は、翻訳者の人選、版権交渉、翻訳、編集、出版、マーケティング、宣伝、販売及び事後調査を担当する。これら一連の活動を通じて、年間 10 冊の日本語図書を翻訳・出版する」。

2009 年、日中の専門家によって構成される図書選考委員会が組織され、推薦図書リストが中国側協力団体に提示された。それを受けて、中国側の協力者である社会科学文献出版社、世界知識出版社、北京大学出版社、南京大学出版社、三聯出版社、人民文学出版社及び新星出版社の関係者からなる「現代日本図書シリーズ編集委員会」が翻訳・出版関連業務を担当し、翻訳者の人選、版権交渉、翻訳、編集、出版、宣伝、販売及び事後調査を実施することになった[3]。

この大型事業は、それまでの日本書の翻訳出版と明らかに異なる特色がある。即ち、日中両国民の相互理解を促進するために、中国の国民を対象に、特に現代日本の社会全般の実情を知ってもらうという目標をもって、比較的体系的に適切な日本の図書を翻訳出版していくという点である。その目的を実現するために、特に図書の選定に工夫がなされた。中国側も次のように図書選定の方針を高く評価している。「1、新しいこと。推薦図書はすべて 1990 年代以後出版したものに限る。2、各分野に亘ること。現代日本の政治、経済、思想、文化、軍事、法律などの諸分野の全面的な紹介。3、権威性。選定にあたっては作者の知名度、著作の影響力に加えて、読みやすさを重視すること。4、親和性。推薦書は中国人読者の読書趣味に適すること」[4]。さらに、図書選考委員会の日

3　https://www.spf.org/sjcff-j/projects/project_21419.html（2020 年 7 月 15 日確認）

4　田雁《“阅读日本书系”的策划与引进》，北京：《现代出版》2014 年第 1 期，第 64 頁。

中双方の選考委員が、まずそれぞれ独自に推薦図書リストを作り、次いで双方が互いに補いあっているので、図書の内容構成の面でバランスが取れたものになっていると言える。

日中双方から出された第1期の計45種類の推薦書目を見ると、中国側は『日本文化の歴史』（岩波書店、2000年）、『日本文化における時間と空間』（岩波書店、2007年）、『富士山と日本人』（青弓社、2002年）、『茶道の歴史』（講談社、1979年）、『戦後日本の大衆文化』（昭和堂、2000年）、『戦後マンガ50年史』（筑摩書房、1995年）など文化系のものが最も多いのに対して、日本側の委員は『日本経済史1600–2000——歴史に読む現代』（慶應義塾大学出版会、2009年）、『国債の歴史——金利に凝縮された過去と未来』（東洋経済新報社、2006年）、『財政学』（有斐閣、2007年）、『現代税制改革史——終戦からバブル崩壊まで』（東洋経済新報社、2008年）、『地方自治』（北樹出版、2007年）、『皇室制度を考える』（中央公論新社、2007年）など、現代日本社会の各分野の理解に資する経済、政治、社会系の書籍が目立つ。今考えれば、これらのものは、中国の読者にとって、それまで盛んに言われた日本文化から一歩も二歩も進んで、さらに現代日本社会の政治・経済・社会構造を直視し、理解するために、きわめて必要かつ有益なことだったと思われる。

この翻訳出版事業の実施期間は、2009～2018年のちょうど10年間で、現代日本の人文社会全般にわたって計111点の日本書を翻訳刊行し、全体の販売部数は40万部以上、1点あたりの平均販売部数は4000部に達した。5000部以上売り上げたものが30点余り、7000部以上も12点、最も売れたものは1万5000部以上でもあった。出版物の社会的反響の面においても、シリーズの規模が大きいこと、内容が多岐にわたり豊富なことなどによって、比較的良好な反響を収めることができた。中国最大の読書ポータルサイト「豆瓣（とうべん）」での口コミを見てみると、108点中101点が「推薦書」のリストに入っており、うち15点は10点満点中の8点以上の高得点を獲得し、読者から高い評価を得ている[5]。

実際に、読者の感想・コメントを見てみると、多くの読者は、日本の優れた書物から新しい知見を得て、これまでよりも多角的に日本を理解できるように

5　事業委員会の中国側の主要関係者に対する聞き取り調査（2020年7月16日）によるもの。調査対象者に感謝申し上げます。

なったことが見て取れる。以下、2 冊の本を例に挙げる。

尾藤正英『日本文化の歴史』（岩波書店、2000 年）

「読了。日本の歴史を知るには、かなり良い一冊だ。」

「日本がなぜ日本になったかに対して、作者なりの回答を出してくれ、一読に値する。」

「薄い一冊。正文はわずか 120 余頁に過ぎないが、限られた言葉に深い意味合いがあり、大変に重厚なものだ（中略）長い間、多くの人は、同文同種の謬見に惑わされたり、ショービニズムに囚われたりして、日本文化を中華文化の付属品あるいは派生物と見なすということに熱中した。それらの人が日本文化の源流を全く知らないこともそうなった理由の一つであろう。（中略）この本は、普通の中国人のあまり知らない日本、想像より大きな魅力を示してくれた日本を描き出している。」

末木文美士『日本宗教史』（岩波書店、2006 年）

「日本の宗教の歴史についての概説読本。言葉が簡潔明瞭で、複雑な宗教の概念をわかりやすく解説しており、読後感が極めて良い。」

「わかりやすい形で深い考えを示しており、思考を広めることに有益だ。」

「思想的に深くて重厚なものがあり、構成も巧みで、日本宗教史の絶好な入門書。前半は特に優れており、日本思想の古層を探求し、古層が外来の衝撃を受けて生まれたもので、“諸神自覚”が佛教伝来の結果だったという。後半では、近世以来の宗教の各方面の様相を提示し、それが決して合理主義への収斂という一言で片づけられるものではないとする。」

つまり、このような著書を通して、読者たちは日本の文化や宗教を考える新たな視点を獲得しているのである。

この事業の実施によってもたらされた波及効果も注目に値する。まず、いくつかの出版社は事業終了後に日本、あるいは東アジア関係のシリーズを立ち上げることになった。上海交通大学出版社の「悦読日本」シリーズ、新星出版社の「都市ブロック」、社会科学文献出版社の「中国問題・日本経験」などがそれにあたる。また、日中双方の研究者は、それぞれ別の関係書籍も世に送り出した。中国側が事業実施の直前に、《中日友好交流三十年（1978–2008）》（政治、経

済、文化教育と民間交流の3巻、社会科学文献出版社、2008年）を刊行したのに対して、日本側も『日中関係史（1972–2012)』（政治、経済、社会・文化の3巻構成、東京大学出版会、2012年）を出版した[6]。中国側の個人協力者も事業図書の選定作業を通じて、日本書の中国語訳、さらに中国書の日本語訳の全体状況を把握する必要性を痛感して、《汉译日文图书总书目　1719–2011》〔日本書中国語翻訳総目録　1719–2011年〕4巻（南京大学出版社、2015年)、《日文图书汉译出版史》〔日本書中国語翻訳出版史〕（南京大学出版社、2017年）を刊行した。他方、《中文图书日译总书目　1868–2016》〔中国書日本語翻訳総目録〕及び《中文图书日译出版史》〔中国書日本語翻訳出版史〕もそれぞれ今年度と来年度の出版予定となっている。そして、事業実施を通して、日中の出版社間の交流が深められることとなり、その成果の一つに、中国側の図書版権の日本への売り込みも少数ながら見られるようになった。具体的には、東京大学出版会は、南京大学出版社から2点、社会科学文献出版社から1点を、岩波書店は、上海交通大学出版社から1点の版権を取得することになったと聞いている[7]。しかし、シリーズの規模が大きいことから、内容も多岐にわたるため、刊行期限や訳者の力量の問題もあり、誤りや不備を指摘される等の問題があったようだ。

以上、1980年代後期及びその20年後の2009年に立ち上げられた二つの大型の翻訳シリーズから、中国の日本書翻訳の一端をのぞいてみたが、ここからは最新情況を見てみたい。

これまで、中国の日本事情は、常に両国の「政治」関係に左右されることが多かった。巨大な共同利益や長い交流の歴史などのほか、過去の不幸な歴史及びその認識、社会体制、国民感情、領土問題などの火種によって国家間関係がぎくしゃくし、悪い影響が多くの分野にまで及んでしまうことがこれまで何度もあった。幸いなことに、ここ数年、日中関係が険悪な局面から脱出し、正常な軌道に戻りつつあり、比較的安定した状態が続いていることは、多くの人の認めるところだろう。

こうした社会的背景の変化は、どのように日本書の翻訳出版に反映している

6　《“阅读日本书系”出版百种图书 助中国公众了解日本》,《中国新闻网》2017年10月9日、http://www.chinanews.com/cul/2017/10-09/8348558.shtml（2020年7月17日確認）

7　中国側事業主要参加者への取材調査による。2020年7月16日。

のだろうか。筆者はいくつかの日本書に注目して、その翻訳出版の内容を検討し、関係する編集者に取材調査を行い、最新の状況確認に努めた。この取材をとおして、かつてと違った日本書翻訳出版の重要な変化を感じるに至った。

編集者を取材するなかで強い印象を受けたことの一つは、日本書翻訳による日本理解の内容の変化である。取材対象者であるX社のJ氏の興味深い表現を借りると、「波や潮を追い求める前に、先に海そのものを知る」ということである。つまり、これまで漫画、アニメ、映画、ゲーム、ライトノベル、ポピュラー音楽、テレビなどの日本の流行文化（ポップカルチャー）、及び和食、着物、華道、茶道、歌舞伎、武道などの日本の伝統文化が真っ先に中国で翻訳紹介され、中国の読者に日本への理解や親近感を持つきっかけとなっていた。これが日本と日本の文化・言語に対する入口の機能を果たし、日本文化ブームも比較的長期間続いてきた。ところがここに来て、そうした流行現象の下に広がるより深い海そのものの秘密を探ってみようという動きが現れてきた、というわけである。筆者の取材に対する以下の回答には、ある種の感慨を覚える。――「結局のところ、もしより切実にこれらの現象を読み解こうとするなら、さらにいっそう体系的に日本全体を理解しなければならない。言い換えれば、矛盾するかに見え、神秘的かつ魅力的な日本文化の由来と行方を知らなければならない」[8]。こうした考え方を踏まえて、J氏の勤めるX社は耳目を集めやすい大衆文化や伝統文化の類にとどまらず、若者及び一般読者を対象に、従来なら実現困難な岩波書店『日本の歴史』（岩波ジュニア新書、全9巻）の翻訳を企画し、2020年4月から《岩波日本史》というタイトルで順次刊行が開始された。初版発行部数も、事前の市場調査などに基づいて、単巻4桁、セット合計5桁の部数とのことである。現今のコロナ禍を考えれば、かなりの部数だと言えるだろう。

このように、中国における日本書翻訳出版は、過去より一段高いレベルに入りかけていると思われる。出版社側と読者側の双方とも、かつての流行文化を主とした個々のベストセラーや特定の話題書に飛びつくことから、より深く体系的に日本の歴史文化、等身大の日本の姿を理解しようとする意欲が高まっている。そのことが、読書傾向の変化をもたらしているように思われる。筆者自

8　X社J氏への書面取材による。2020年6月11日、7月7日。また、姜淮《〈岩波日本史〉是这么来到大陆的》（「岩波日本史はこのように大陸にやってきた」）、WeChat公式アカウント《出版人杂志》、2020年5月18日。

身の教育と研究でも、そうした変化を身近に感じている。ここ7、8年来、筆者は大学3年生向けの日本近代史の授業を担当している。4、5年前までは、日本版の教科書、特に参考書の中国語翻訳が少なくて、困っていた。しかしここ数年来、状況が大きく改善され、教育に必要なものはほとんど中国語訳で読めるようになった。幕末、黒船来航、明治維新、日清戦争、日露戦争、明治天皇等々、時代ごとについてのもの、重大な歴史事件や重要な歴史人物についてのものなど、多くの基本書の中国語訳が手に入るようになってきた。

あるコンサルティング会社による近年の中国における出版市場調査報告書「流行文化から巻き起こされた日本書ブーム――最近三年の日本書の版権取得及びその出版分析」によると、次のような点が注目される。(1) 中国にとって、日本は、米国と英国に次ぎ、第3位の図書輸入国となっており、出版企画における日本書の被選定率上昇は、出版市場シェア占用率上昇より大きい。(2) 文学系の占める市場シェアは5割超。(3) 哲学、宗教、歴史、地理系図書の出版増加が著しい。(4) 文学分野では、東野圭吾作品の市場価値が最も高いが、出版企画では夏目漱石作品の推薦優先度が最も高いという[9]。この調査結果は、筆者自身にも思い当たる節がいくつもある。

もう一つ、出版業界及び読者のより深い意識の変化を表す出来事がある。それは日本書に何を求めるかということである。多くの人は、流行文化・伝統文化、ベストセラー、話題書への関心から、日本書をとおして本格的に日本の歴史・文化を学び、より深いレベルで理解しようと望んでいる。さらに、こうした日本理解の深化の延長線上には、日本・中国の別を問わず、より根源的なことを考えてみようという動きも生まれている。例えば、上述した《岩波日本史》に先んじて翻訳出版された講談社の『中国の歴史』(中国語のタイトルは《讲谈社・中国的历史》全10巻、桂林:広西師範大学出版社、2014年) 及び今年刊行された同じく講談社の『興亡の世界史』(中国語のタイトルは《讲谈社・兴亡的世界史》全21巻、第1期9巻、理想国・北京日報出版社、2020年) の二つがよい実例になる。

特に『中国の歴史』は中国で重版となり、翻訳出版界に旋風を巻き起こした

9　中金易云《流行文化带动日本图书热潮――近三年日本引进版图书分析》(「流行文化から巻き起こされた日本書ブーム――最近三年の日本書の版権取得及びその出版分析」)、WeChat公式アカウント《中金易云》、2020年6月12日。

と言われるほどの人気書、話題書となっている。このような日本書に対して、中国の出版社と読者たちの関心は、その本に書かれた知識よりも、むしろ本の底にある新鮮で柔軟な普遍性のある発想、視点と方法、ないし中国、世界、歴史、人類などについての編著者たちの思考方式そのものにあるように見える。講談社の『中国の歴史』と岩波の『日本の歴史』の翻訳出版及びその大ヒットについて、前述の編集者J氏は次のような興味深い話を語ってくれた。上に挙げた中国史や日本史を読んで、

> 一つに、倫理道徳を超えた価値観。これがとても大事だ。中国書の場合は、礼義廉恥のような道徳説教が多すぎる。日本の場合は、そういう過剰な道徳的束縛から自由である。同時に“美”の価値観が大事にされている。二点目は、（日本は）中華主義的な思考様式があまりないように見える。我々の歴史書には、天朝意識、即ち自国中心の発想が強い。この点で、日本はかなり違う。日本人の歴史叙述は、自ら進んで東アジアと全世界から日本の歴史を見ようとしている。これは中国の学者のなしえない点である。日本人の書いた中国史は、史料面は中国に及ばず、理論面では欧米人に及ばないかもしれないが、彼らのすごさは、真摯にアジアの立場から中国あるいは日本の歴史を見る点にあると思う。[10]

J氏のこうした見解に対して、筆者は一介の日本語日本文化教育者研究者として、まったく同感である。少なくとも上の2点については、日本と中国はある意味で対照的な位置にあるのではないかと思っている。

現在好評を博している講談社の『中国の歴史』と『興亡の世界史』について、中国の歴史研究者と読者が様々な場で感想や称賛の声をあげている。その一部を見てみよう。

- 世界の中国史研究において、日本人研究者には自分たちならではの伝統と個性が備わっており、独自の強みを有する。文化的学術的な伝統の相違によって、欧米人と日本人の中国史を見る際に、視点も、興味も、重点もそれぞれ異なるため、読者に斬新な感じを与えている。（清華大学張国剛教授）

10　X社J氏への書面取材による。2020年6月11日。

- 教育及び研究体制の差異によって、日本の研究者は知識の幅広さという点で中国の研究者に優る。後者は特定の専門の枠に囚われる弊があるようだ。（中国社会科学院許宏教授）
- 大衆向けの歴史書は、歴史の叙述をその時代の生きた生身の人間たちの感知、歴史全体の情景、及び人間の普遍的な価値観へと還元しなければならないと同時に、最も新しい研究成果をも取り入れなければならない。そうした意味で、専門的な学術書と比べても、その難しさは少しも変わらないだろう。（復旦大学姚大力教授）

研究者だけではなく、一般読者の感想にも興味深いものがある。

- 外国人の視点から中国を見ることは、もしかしたら、我々自身に固有の執着や保守性を打ち破ってくれるかもしれない
- 現在の時代的政治に合わせることをせず、真の史料を用いて、歴史の真相を提示したものこそ、良い歴史書だと言えよう。
- 外国人研究者によって現実的な政治と離れた立場から書かれた中国の歴史は、かえって客観性があり、本当の歴史に近いだろう。……大学時代に資料を調べた時、教科書で学んだたくさんのものが違っていたことに気づき、非常に困惑した。特に近現代の中国史について。今日になって、これらの問題に問いかけと見直しを始めたことは、開放と進歩の表われでもあろう。[11]

こうして日本書をとおして、多くの人が「他者」の声に耳を傾け、二者択一、二元対立的な立場に警戒し始め、より多元的で柔軟な発想で物事を考えようとする姿勢は注目に値する。ポータルサイト「豆瓣読書」に書かれた次のコメントはその一つである。「外国人の書いた中国史を読むにあたっては、なるべくその人の見方がどういうものなのか、どのようにできたのかを理解しなければならない。さらに言えば、相手の歴史意識や目的意識を理解してはじめて、相手と議論することが可能になるだろう」。[12]

11　WeChat 公式アカウント《群学书院》、2020 年 7 月 19 日。

12　《豆瓣读书》を参照。https://book.douban.com/review/7362977/（2020 年 7 月 20 日確認）

以上見たように、非常に限定的ではあったが、改革開放以来の特にここ10年の日本書の翻訳出版及び読書傾向は絶えず変化発展の軌跡を示している。ごく自然なことだが、最初はしばしば先入観を伴う形で、政治的に安全なラインを注視しながら、学術書のほか、大衆 - 流行 - 趣味 - 人気 - 話題などを軸に、日本を知るための日本書翻訳出版の第一波が現れた。次いで、出版者側から一般読者まで、とりわけ日本の歴史、宗教、哲学、文化、文学の分野で、日本理解の視野を広げ、より体系的に深く日本を知るための書物の翻訳出版が可能となる局面を迎えることになった。最近では、さらに興味深い動向が見て取れる。日本史、世界史、中国史の翻訳出版及び大ヒットに示されるように、人々は自己相対化の意味も含めて、「自己」「自国」を見直し始める一方、日本書に求めようとするものも、知識そのものを超えて、日本書の全体に現れた著者及び日本人的な発想の仕方、思考回路、研究の視点と方法に強い関心を注ぐようになってきている。さらに、現在の読書傾向から窺えるように、日本書の読書を通して、自己の不足を補うことを図り、より合理的で普遍性のある価値観を再確認し、通用性のある真の常識へ回帰するという願望さえ生まれ始めているように、中国で暮らしている筆者は感じている。

Recent Trends in the Publication, Translation, and Reading of Japanese books in China

PAN Shisheng*

This paper examines the trends in the publication, translation, and reading of Japanese books in China in recent years. At the end of the 1980s, Jiangsu People's Publishing House published its "Series of Chinese Studies Overseas," causing a sensation in the academic and cultural worlds. In 2009, China and Japan launched the joint publication project "Reading Modern Japanese Books," and in ten years, 111 Japanese books were translated into and published in Chinese. In recent years, books widely and systematically treating Japanese society,

* Professor, School of Foreign Languages of East China Normal University

history, ideology, and culture have been given priority for translation, enabling readers to reflect on China through these Japanese works, and also on fundamental issues concerning universal values.

Keywords: China, Japanese books, translation and publication, reading trends, growing demand for Japanese books